

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 6

— 平成7年度 —

1996. 3

香芝市教育委員会

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 6

— 平成7年度 —

1996. 3

香芝市教育委員会

例 言

1. 本書は香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が平成7年度に香芝市内で実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本書には、国庫補助金対象事業以外の民間開発事業（受託事業含む）に伴う10件の埋蔵文化財発掘調査の概要を収録している。

なお、平成7年度に実施した国庫補助金対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要については『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報5』として別途刊行している。

2. 調査は、下記の組織で実施した。

（1）現地調査

〔調査員〕 山下隆次、下大迫幹洋（いずれも香芝市二上山博物館学芸員）

〔作業員〕 吉岡藤雄、古山亨、森統、山野恵三

〔補助員〕 島田良子、田中久美子

（2）事 務

香芝市教育委員会事務局

社会教育課 二上山博物館（館長 石野博信）

3. 本書の挿図の座標値は国土座標第VI座標系による。また、標高は海拔高で示している。
4. 本書の執筆は、それぞれの調査担当者が執筆し、目次に文責を明記した。
なお、編集は下大迫が行った。
5. 発掘調査を実施した各遺跡の遺構や遺物の写真・図面等の調査記録及び出土遺物等は香芝市二上山博物館（香芝市藤山1丁目17-17）所轄のもとで保管している。

本文目次

1. 桜ヶ丘第1地点遺跡第7次調査	（山下）	1
2. 今泉遺跡第3次調査	（下大迫）	3
3. 黒岩遺跡第1次調査	（下大迫）	5
4. 遺物散布地の調査		7
(1) 遺物散布地第2次調査	（山下）	7
(2) 遺物散布地第3次調査	（下大迫）	8
5. 狐井遺跡の調査		10
(1) 狐井遺跡第11次調査	（山下）	11
(2) 狐井遺跡第12次調査	（山下）	12
6. 清風荘第3地点遺跡の調査		13
(1) 清風荘第3地点遺跡第2次調査	（山下）	14
(2) 清風荘第3地点遺跡第3次調査	（山下）	15
7. 鎌田遺跡の調査		16
(1) 鎌田遺跡第9次調査	（山下）	17
(2) 鎌田遺跡第10次調査	（山下）	18
8. 別所石塚古墳第2次調査	（下大迫）	19
9. 関屋第2地点遺跡第4次調査	（山下）	21
10. 顯宗陵古墳第3次調査	（下大迫）	23

図目次

図1 平成7年度発掘調査地位置図 (S = 1/50,000)	
図2 桜ヶ丘第1地点遺跡調査地位置図 (S = 1/5,000)	1
図3 今泉遺跡調査地位置図 (S = 1/6,000)	3
図4 黒岩遺跡調査地位置図 (S = 1/4,000)	5
図5 遺物散布地調査地位置図 (S = 1/5,000)	7
図6 狐井遺跡調査地位置図 (S = 1/6,000)	10
図7 清風荘第3地点遺跡調査地位置図 (S = 1/6,000)	13
図8 鎌田遺跡調査地位置図 (S = 1/6,000)	16

図9	別所石塚古墳調査地位位置図 (S = 1 / 6,000)	19
図10	関屋第2地点遺跡調査地位位置図 (S = 1 / 6,000)	21
図11	顯宗陵古墳調査地位位置図 (S = 1 / 5,000)	23

表 目 次

表1 平成7年度発掘調査地一覧 (国庫補助金対象事業以外)

図 版 目 次

図版1	桜ヶ丘第1地点遺跡第7次調査
図版2	今泉遺跡第3次調査
図版3	黒岩遺跡第1次調査
図版4	遺物散布地第2・3次調査
図版5	狐井遺跡第11・12次調査
図版6	清風荘第3地点遺跡第2次調査
図版7	清風荘第3地点遺跡第2・3次調査
図版8	鎌田遺跡第9・10次調査
図版9	別所石塚古墳第2次調査
図版10	関屋第2地点遺跡第4次調査・顯宗陵古墳第3次調査

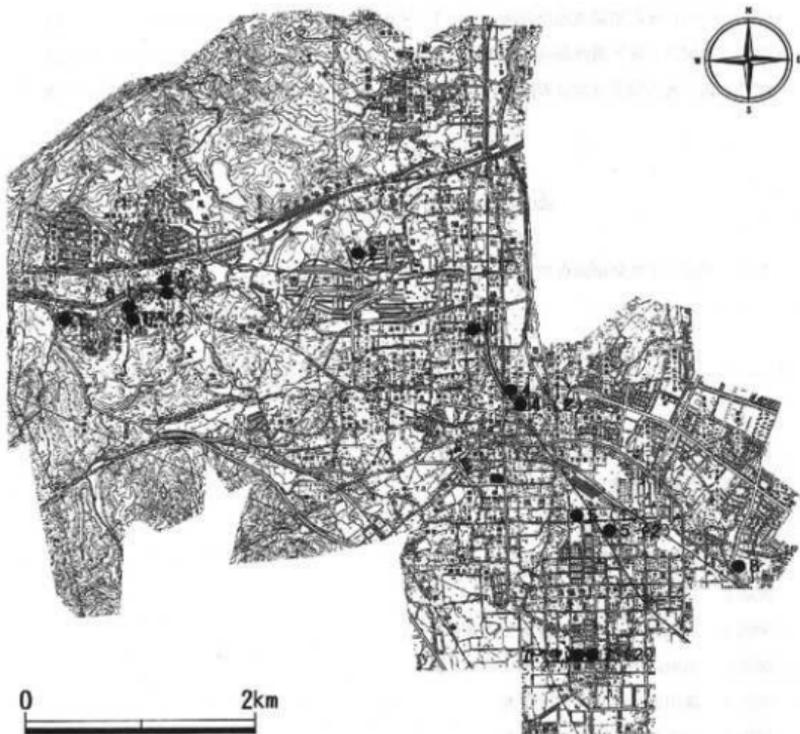


図1 平成7年度発掘調査地位置図 (S=1/50,000)

表1 平成7年度発掘調査地一覧 (国庫補助金対象事業以外)

No	遺跡名	調査回数	調査地	調査期間	開発内容	調査面積
1	桜ヶ丘第1地点遺跡	第7次	穴虫3138-28、3138-48	5/30~6/8	分譲住宅建築	17㎡
2	今泉遺跡	第3次	今泉1199-3番地	6/1~6/2	宅地造成	35㎡
3	黒岩遺跡	第1次	関屋1009・1012・1013番地	6/7	集合住宅建築	53㎡
4-(1)	遺物散布地	第2次	下田東1丁目91-3	7/27	分譲住宅建築	40㎡
4-(2)	遺物散布地	第3次	下田西4丁目149	12/12	分譲住宅建築	60㎡
5-(1)	狐井遺跡	第11次	狐井353-3、355-3	10/13~10/14	宅地造成	35㎡
5-(2)	狐井遺跡	第12次	狐井555番地の一部	2/8	宅地造成	20㎡
6-(1)	清風荘第3地点遺跡	第2次	穴虫3049-1番地他	8/25~11/29	学校造成	177㎡
6-(2)	清風荘第3地点遺跡	第3次	穴虫3080-4	11/11~11/29	宅地整地	45㎡
7-(1)	藤田遺跡	第9次	藤田415-1	11/17~11/18	共同住宅建築	30㎡
7-(2)	藤田遺跡	第10次	藤田414-1	2/20~2/21	宅地造成	60㎡
8	別所石塚古墳	第2次	別所95-1番地他	1/17~1/27	道路建設	48㎡
9	関屋第2地点遺跡	第4次	関屋996-3・997-2他	11/22	共同住宅建築	4㎡
10	顕宗隆古墳	第8次	北今市4丁目327番地	2/14	分譲住宅建築	60㎡

1 桜ヶ丘第1地点遺跡第7次調査

1 はじめに

桜ヶ丘第1地点遺跡は香芝市穴虫小字赤土平に所在し、二上山北麓に分布する旧石器時代の遺跡群を代表する遺跡の一つである。他の遺跡の多くが二上層群及び大坂層群で形成される丘陵の頂部や斜面上に立地するのに対して、寺山火山岩を基盤とし、西側を原川、北側を前川によって形成された河成段丘面上に立地する。

当遺跡は樋口清之氏が昭和6年に報告し、その後、同志社大学旧石器文化談話会による二上山北麓石器時代遺跡群分布調査の一環として昭和46年に再確認された。そして、昭和50年に奈良県立権原考古学研究所によって、初めて発掘調査が実施された（第1次調査）。その後、昭和56年度から二上山北麓遺跡群は香芝町教育委員会（当時）が主体となり発掘調査を実施してきた。

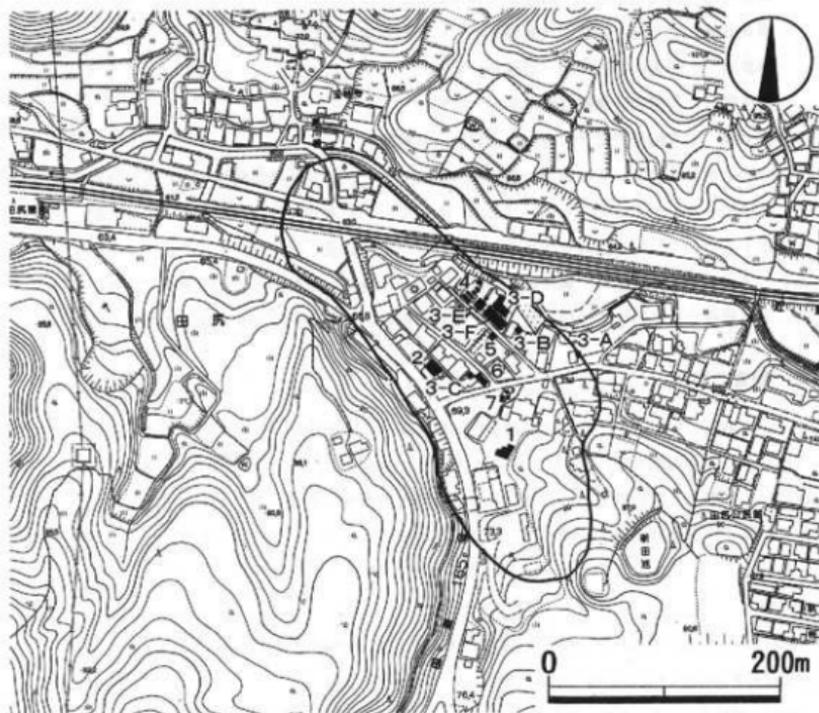


図2 桜ヶ丘第1地点遺跡位置図 (S = 1/5,000)

II 調査の概要

今回の発掘調査は平成7年4月18日付けで分譲住宅建築のため地主から発掘届出書が提出され、香芝市教育委員会が地主と協議を行い、発掘調査を実施することになった。

今回の調査地は第6次調査が行われた地点から道路をはさんだ南側の宅地である。調査は5月30日から開始した。まず、地層の堆積を確認するため、調査地の中央南側で試掘トレンチを東西方向に0.5m×2m設定して掘削を開始した。そして、その状況を見て試掘トレンチの北0.5mの地点から2m×2mのグリッドを3カ所設定した。さらに翌31日にもう1カ所2m×2mのグリッドを設定した。試掘トレンチの層序は以下の通りである。

- 第I a層 黄灰色砂質土(層厚20cm) 既存建物建築時における盛土
- 第I b層 暗茶褐色砂質土(層厚40cm) 寺山火山岩(基盤層)の客土
- 第II a層 黄褐色砂質土(層厚5~15cm)
- 第II b層 明黄褐色砂質土(層厚40cm) 旧石器遺物包含層
- 第III層 明黄褐色砂礫層(層厚10~45cm)
- 第IV層 黄橙色砂礫層(層厚30cm)
- 第V層 赤褐色を呈する寺山火山岩層(基盤層)

この中で第I a層から第III層までで遺物が包含しており、第II b層が純粋な旧石器包含層である。

この試掘トレンチの結果から各グリッドにおいて、旧石器時代の包含層である第II b層の広がりを確認することを目的に調査を進めることにした。その結果、設定した4カ所のグリッドすべてにおいて第II b層が確認され、翼状剥片や同石核などの遺物が多数出土した。そして、各グリッドにおいて基盤層である寺山火山岩を確認し、写真撮影のあと土層断面図を作成して調査を完了した。

III 調査の結果

今回の調査において、これまでの調査と同様に多くの遺物が出土した。そして、旧石器時代の包含層が今回の調査地まで広がっていることも確認できた。さらに、南約30mで実施された第1次調査では、基盤が大版層群であったのに対して今回の調査地の基盤は寺山火山岩であった。このことから、第1次調査地と今回の調査地の間で基盤層が分かれることも確認できた。

文 献

同志社大学旧石器文化談話会 1972「大和国香芝町の先土器時代遺跡」『青陵』No.20

同志社大学旧石器文化談話会編 1974『ふたがみ』学生社

奈良県立橿原考古学研究所編 1979『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県教育委員会

樋口清之 1931「大和二上石器製造遺跡研究」『上代文化』第4・5号合併号

2 今泉遺跡第3次調査

1 はじめに

今泉遺跡は、香芝市今泉の集落の西方、明神山頂部から南側に向かって緩やかに派生するサヌカイト製石器の散布地である。標高約1373m前後の丘陵頂部一帯約500m²が周知の遺跡範囲として取り扱われている。

周辺には、横穴式石室を有する7世紀初頭の山口古墳や6世紀後半の上中ヨロリ古墳第1・2号墳が丘陵東側斜面中腹には奈良時代?の掘立柱建物跡等からなるガモ池遺跡等が所在する。

また、当遺跡から南方約100mの地点で横穴式石室と推定される石室状の構築物内から7世紀中頃の土器類と共に銀装大刀1振が発見されており、さらにこの大刀の他にも別の地点から奈良時代中頃の須恵器の短頸壺を転用した骨蔵器1点が出土していたことが明らかにされている。

これまで今泉遺跡では、合計2次の発掘調査が実施されており、若干のサヌカイト片が出土した以外は顕著な遺構や遺物等は検出されていないが、近年、同丘陵上から骨蔵器と推定される須恵器壺の破片が採集されており、当丘陵には新たに火葬墓等が存在する可能性が強くなった。

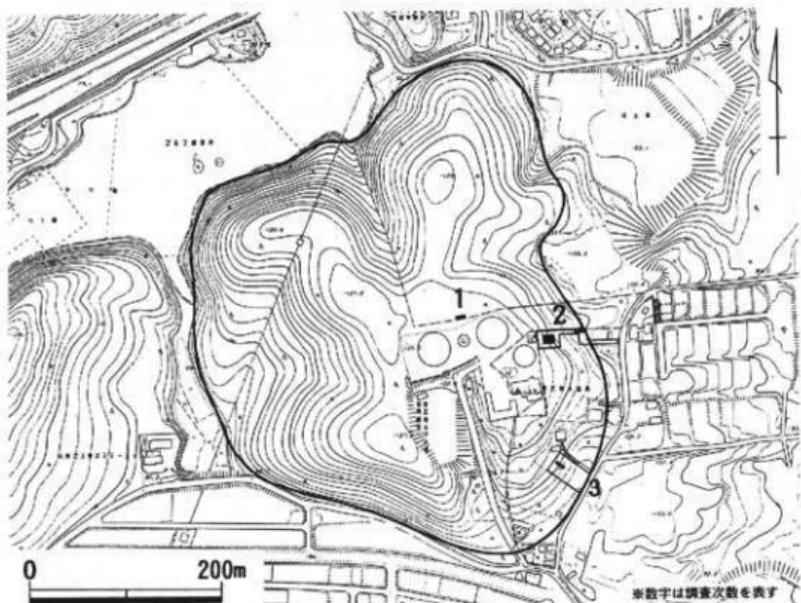


図3 今泉遺跡調査地位位置図 (S=1/6,000)

II 調査の概要

発掘調査は、分譲住宅建築に伴う宅地造成工事のため平成7年6月5日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。開発予定区域の西側の一部が遺跡範囲に含まれているのみであるが、切土工法により深く掘削されるため、香芝市教育委員会が事業者と協議を行い、遺跡の範囲内に含まれる部分について試掘調査を実施することとなった。

現地調査は、周知の遺跡範囲内にあたる開発区域西側丘陵斜面に東西5m×南北5mの試掘調査区を設定して人力による試掘調査を実施した。

調査区の基本層序は下記のとおりである。

- 第1層 暗茶褐色土層〔層厚20cm〕(現代表土)
- 第2層 灰褐色砂質土層〔層厚10cm〕(丘陵上方からの流入土層)
- 第3層 灰褐色砂質土層〔層厚10cm〕(2層に比してやや軟質。丘陵上方からの流入土層)
- 第4層 灰茶色砂質土層〔層厚30cm〕(丘陵上方からの流入土層)
- 第5層 灰茶色砂質土層〔層厚50cm〕(やや粘質)
- 第6層 黄褐色粘質土層 (地山、よく締まる)

周辺の既往の発掘調査の結果から、第6層以下には、付近の基盤層である安山岩系統の岩盤層があるものと思われるが、岩盤層中には遺物や遺構は存在しないため、何らかの遺構検出が期待される第7層の黄褐色粘質土層上面で遺構検出作業を実施することとした。

精査の結果、遺構は検出されず、丘陵上方からの流入土層である第3～5層中から近世磁器や時期不明の土師器と須恵器壺(底部)の細片数点、サヌカイト製石器の破片1点が出土したのみであったため、写真撮影および図面作成後、翌日には埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は25㎡、調査期間は平成7年6月1日～6月2日まで、実働は2日間を要した。

III 調査の結果

試掘調査の結果、顕著な遺構や遺物は検出されなかった。とくに今回の調査地より丘陵上方にあたる西側から南東斜面にかけては地形的、立地条件的に二上山北東山麓や奈良盆地南東方面への視界が開けており、将来、この緩傾斜面で奈良時代の火葬墓等にかかわる何らかの遺構や遺物が検出される可能性がある。

文 献

- 香芝市教育委員会編 1994「今泉遺跡第1次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 1995「今泉遺跡第2次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報4』香芝市教育委員会

3 黒岩遺跡第1次調査

I はじめに

黒岩遺跡は、香芝市関屋小字黒岩に所在するサヌカイト製石器の散布地である。当遺跡は、付近の踏査を続けた樋口清之氏や松本俊吉氏らによって発見され、1974年に旧石器文化談話会による分布調査で翼状剥片石核等の石器が採集されたことから旧石器時代にまでさかのぼる遺跡であることが明らかにされた。

遺跡は、関屋集落南方から派生する丘陵間にはさまれた標高約80~90m前後の谷間を中心に遺物の分布が認められており、遺跡の南方約50mの丘陵上には清風荘第2地点遺跡が、さらに南方の丘陵北斜面には清風荘第1地点遺跡等が所在する。

現在、遺跡を二つに分断するように近鉄大阪線が横断しており、また、遺跡付近一帯は後世の畑地造成や近年の住宅開発に伴って大きく旧地形が改変されている。黒岩遺跡では、1987年にナイフ形石器等の旧石器時代の石器が少量採集されているのみで、本格的な発掘調査は実施されておらず遺跡の範囲や遺物包含層の有無等詳細な実態は不明である。

今回の調査地は、関屋集落の南西丘陵末端部、現在遺物の分布範囲と周知されている遺跡の北西隅に当たる地点である。

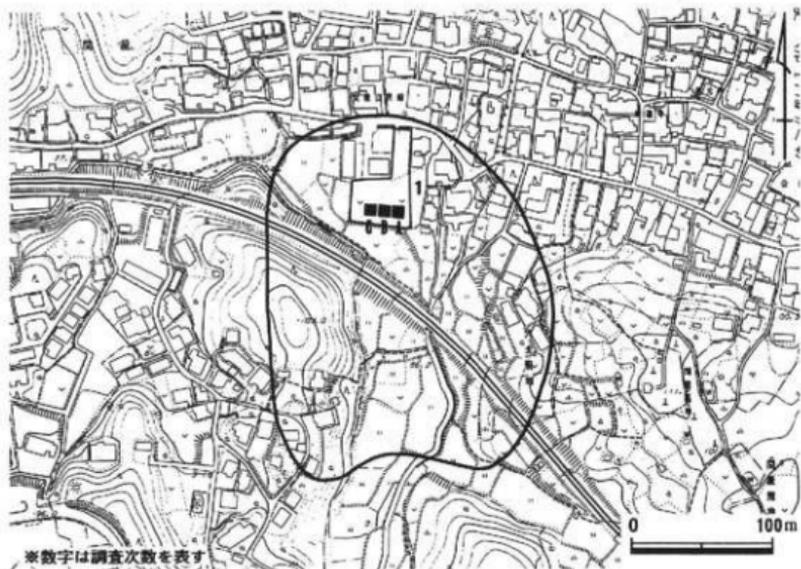


図4 黒岩遺跡調査地位位置図 (S=1/4,000)

II 調査の概要

今回の発掘調査は、マンション建設工事のため平成7年5月26日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。地下遺構が存在した場合、埋蔵文化財の破壊行為は必至とみられたため、香芝市教育委員会が事業者と協議を行い、発掘調査を実施することになった。

現地調査は、開発区域の東西南北の計4箇所¹に1×1mの試掘坑を設定して、地下の基本層序の把握および遺構や遺物の有無確認のための試掘調査から実施した。

各試掘坑の基本層序は、下記のとおりである。

- 第1層 暗茶褐色砂質土層〔層厚約25cm〕(現代の畑地等の耕作土)
- 第2層 黄褐色砂質土層〔層厚約18cm〕(床土)
- 第3層 暗灰褐色砂質土層〔層厚約27cm〕(整地土層。基盤層の黄褐色粘質土層塊混在)
- 第4層 灰褐色砂質土層〔層厚約30cm〕(整地土層。基盤層の黄褐色粘質土層混在、サヌカイト製石器の剥片・近世土器片等を包含する)
- 第5層 暗灰色砂層〔層厚約1m〕(中粒～粗砂、湧水多い)

試掘調査の結果、開発地域一帯は、比較的地下水の豊富な丘陵谷間に位置し、丘陵上面の関屋集落拡張の際に削平された客土によって埋め立てられた造成地であることが判明した。

このため、丘陵上面からの2次堆積層である第4層(灰褐色砂質土層)中に包含するサヌカイト製石器等の遺物採集を調査の主眼として開発予定区域南側に一辺4m×4mの調査区を東西方向に3箇所(東からA・B・C調査区)設定して人力による発掘調査を実施した。

サヌカイト製石器は丘陵に近い調査区ほど多く分布するという傾向を示し、現況では丘陵先端部に当たる第3調査区では遺物はほとんど皆無であった。また、全体的にサヌカイト製石器の剥片の分布密度は低く、小さな剥片ばかりで総じて定形的な石器は少なかったが、石槍の未製品など弥生時代の所産と推定される石器の剥片などコンテナ約2箱分のサヌカイト製石器の剥片が出土した。

III 調査の結果

発掘調査の結果、調査地の大半は近世?の造成に伴って大規模な地形の改変を受けており、純粋な遺物包含層の検出には至らなかった。しかし、調査地東方の関屋集落丘陵上面からの造成土中にはサヌカイト製石器の剥片が包含しており、現在でも丘陵上面には多くのサヌカイト製石器の剥片が散布していることから丘陵一帯にはとくに弥生時代を中心とした石器生産に伴う遺跡の広がりが予想される。

4 遺物散布地の調査

I はじめに

当遺跡は香芝市の中央部、下田東1丁目付近の水田約300m圏内にわたって分布すると考えられている古墳時代の遺物散布地である。

遺跡は、藤山丘陵の丘陵末端部から大和川の支流である葛下川沿いに形成された沖積低地付近を中心に立地しており、遺跡の西約100～200mの丘陵上には小規模な円墳からなる古墳時代後期の北今市・藤山古墳群（現在ほとんど大半が消滅）をはじめ古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物群が検出された藤山遺跡等が所在する。

当遺物散布地ではこれまで1次の発掘調査が実施されているが、顕著な遺構や遺物は未検出であり、遺跡の中心部や範囲等まだまだ不明な点が多い。

今回の調査地は周知の遺跡範囲として認識されている遺跡の南端にあたる箇所である。



図5 遺物散布地位置図 (S=1/5,000)

(1) 遺物散布地第2次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は平成7年7月18日付けで施主から発掘届出書が提出され、香芝市教育委員会が事業者と協議をおこない、発掘調査を実施することになった。

調査は7月27日から開始した。まず、調査地の中央で2m×20mの試掘トレンチを東西方向に設定し、重機で掘削を開始したが遺構・遺物は検出されなかった。

層序は以下の通りである。

- 第1層 造成時の盛土 (層厚55cm)
- 第2層 暗灰色砂質土 (層厚20cm・現代耕作土)
- 第3層 明灰褐色砂質土 (層厚5cm・現代床土)
- 第4層 灰褐色粘質土 (層厚17cm・整地土)
- 第5層 明黄褐色土 (地山)

II 調査の結果

今回の調査において、第1次調査と同様に遺構・遺物は検出されなかった。これは、調査地周辺が藤山丘陵と馬見丘陵の谷間の低地にもかかわらず堆積土が少ないため、地山が現地表面から約40～50cmと浅く、また、近くに葛下川が流れていることから地下水位が高いため、現地表面においても絶えず水が湧いている状況であることから、この周辺は居住地域としては適していなかったと考えられる。今後の調査により、当遺跡の性格等が解明されることを期待する。

(2) 遺物散布地第3次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、分譲住宅建設のため平成7年1月20日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。とくに擁壁設置箇所での地下遺構へ与える影響が懸念されたため、香芝市教育委員会が事業者と協議を行い、とりあえず遺跡の有無確認のための試掘調査を実施することになった。

地下の基本層序の把握および遺構や遺物の有無確認のため、開発区域の南北それぞれ2箇所南北長さ20m×東西幅2mの調査区を設けて試掘調査を開始した。

調査区の基本層序は下記のとおりである。

- 第1層 暗灰色砂質土層 (層厚20cm) (現代耕作土)
- 第2層 明灰褐色砂質土層 (層厚5cm) (現代床土)
- 第3層 灰褐色砂質土層 (層厚5cm) (層上面にマンガン斑粒を含む。水田造成に伴う整地土層)
- 第4層 灰褐色砂質土層 (層厚10cm) (第5層の地山土塊が混入する)
- 第5層 黄灰褐色砂質土層 (地山)

各層中では顕著な遺構や遺物は確認されなかったため、付近一帯の基盤層である第5層(黄灰褐色砂質土層)上面での遺構検出作業を実施した。第5層は、調査区の南側から北側にかけて緩やかに傾斜しており、調査区南端から北端の比高差は20cmを測る。基盤層直上からも顕著な遺構や遺物は確認されなかったことから全面的な本調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成及び写真撮影終了後、当日中に埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は28㎡、調査期間は平成7年2月13日の1日間のみであった。

II 調査の結果

今回の調査地は、藤山丘陵と馬見丘陵の2つの丘陵に挟まれた合間の低地部分に位置するため、

付近の地山である黄褐色～灰褐色粘質土層（小礫混じり）の埋没深度が深いものと推定されていたが、予想に反して地山の埋没深度が浅く、丘陵の末端部であることが確認できた。

しかし、これまで実施した2次の調査では遺構や遺物は皆無であり、今後、遺跡としての扱いを再検討する必要がある。

文 献

香芝市教育委員会編 1995「遺物散布地第1次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報4」香芝市教育委員会

5 狐井遺跡の調査

I はじめに

狐井遺跡は香芝市狐井の集落東方、通称狐井丘陵の南東一帯に広がる遺跡である。この遺跡は、昭和10年ごろ遺跡の北東に位置する改正池で縄文土器や石鏃などが採集され、翌11年に樋口清之氏により報告されその存在が知られるようになった。その後、個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査によって、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明した。なかでも、平成5年度に実施した宅地造成に伴う調査（第8次調査）では、近畿地方でも数少ない縄文時代前期から中期初頭の土器約3,000点をはじめ、石鏃600点以上のほか石匙、石鏝などのサヌカイト製石器類、その他サヌカイト片が数万点、さらに、獣骨（イノシシ、シカ）も出土し、当遺跡の重要性が指摘されている。



図6 狐井遺跡調査地位位置図 (S = 1/6,000)

(1) 狐井遺跡第11次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、宅地造成工事に先立って平成6年7月27日付けで施主から発掘届出書が提出され、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することになった。

調査地は、昭和10年ごろ縄文土器等が大量に出土した改正池の北西約100mの地点である。

まず、調査地の南西で2m×10mのトレンチ(Aトレンチ)を設定して掘削を開始した。しかし、予想に反して現地表面から約50cmで地山を検出し、その地山直上で遺物が数点出土するにとどまった。そして、地山の面で平面を精査したが、遺構は検出されなかった。そのため、当初予定したトレンチを縮小し(2m×5m)、他の地点を掘削することにした。

次に、南東で2m×5mのトレンチ(Bトレンチ)を設定した。このトレンチでは現地表面から約45cmで地山を検出した。しかし、この面で須恵器等の遺物が10点ほど出土したことからトレンチ幅を1m拡張した。しかし、拡張部分からは遺物はほとんど出土せず、また、遺構も検出されなかった。そして、調査地の北西で2m×5mのトレンチ(Cトレンチ)を設定した。このトレンチでは北側で現地表面から約60cmで地山を検出したが、遺物は須恵器片2点のみで遺構は検出されなかった。

なお、層序は以下の通りである。

第1層 暗灰色土(層厚約15~20cm、現代耕作土)

第2層 橙褐色土(層厚約2~5cm、水田床土)

第3層 灰色粘質土(層厚約10~40cm、客土)

II 調査の結果

今回の調査では予想に反して地山が浅く、また、地層堆積と遺物出土状況からすると、かつてこの部分は東に所在する狐井丘陵の裾であったと推測される。そして、南西約100mに所在する狐井城山古墳(全長約150mの前方後円墳)で採集される円筒埴輪と同じタイプの埴輪が出土したことから、かつて狐井丘陵の南を南西から北東方向に流れていた初田川を、中世に狐井丘陵の裾を開発して強引に南北方向につけかえられたと考えられる。

今回の調査によって遺跡の中心は、初田川の旧流路より東側、つまり改正池の東および南側に広がることが確実となった。

文 献

樋口清之 1936「新発見の縄文式土器出土遺跡—大和下田村狐井遺跡—」『大和志』第3巻第11号

(2) 狐井遺跡第12次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、宅地造成工事のため平成8年1月23日付けで施工主から発掘届出書が提出されたことに始まる。調査地は、平成5年度の調査(第8次調査)で大量の縄文時代前期の土器等が出土した地点から北北東約50m、平成6年度の調査(第10次調査)を行った地点からは北へ約60mの位置にある。平成5年度に検出した縄文時代前期の土器等を大量に含む溝は北北西の方向にのびており、平成6年度に検出した自然流路は北へ流れていた。このことから、平成5年度に検出した溝や平成6年度に検出した自然流路は今回の調査地内を通過していないことが予想された。

調査は2月8日から開始した。まず、縄文時代前期の溝が調査地内に存在するかどうかを確認するため、調査地の西側で北と南の2カ所に2m×10mのトレンチを設定して南側のトレンチを西から掘削した。しかし、遺物や遺構が検出されないまま、現地表面から約76cmで地山を検出した。そのため、トレンチの掘削を3mで終え、調査地の南東で2m×3mのトレンチを設定して掘削したが、ここでも遺物や遺構が検出されないまま、現地表面から約66cmで地山を検出した。次に、北側で設定したトレンチを西から掘削したが、ここでも同様に現地表面から約65cmで地山を検出したため、トレンチの掘削を3mで終えた。そして、最後に北と南のトレンチの中間地点でも掘削を行ったが、結果は同様であった。基本層序は以下の通りである。

第1層 茶褐色土(層厚約16~20cm、現代耕作土)

第2層 青灰色粘質土(層厚約15~19cm、水田床土)

第3層 淡褐色粘質土(層厚約20~16cm)

第4層 淡灰色粘質土(層厚約10~25cm)

以上の結果から、遺物や遺構が皆無であったためこれ以上の掘削は断念し、写真撮影のあと埋戻すことにした。実働は1日、調査面積は20㎡であった。

II 調査の結果

今回の調査では当初の予想通り縄文時代前期の溝は検出されず、また、自然流路も検出されなかった。このことから、調査地は南西に広がる微高地と東側を南から北に流れる自然流路にはさまれた低地で、生活地域ではなかったことが判明した。

文 献

香芝市教育委員会編 1994『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編 1995『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3』香芝市教育委員会

6 清風荘第3地点遺跡の調査

1 はじめに

清風荘第3地点遺跡は香芝市の西端、学校法人樟蔭学園を中心とする丘陵に位置する弥生時代の石器生産に伴う遺跡である。

当遺跡は学校法人樟蔭学園の移転計画に伴い、奈良県立橿原考古学研究所の依頼を受けた同志社大学旧石器文化談話会が昭和53年6月3日に分布調査を実施した際、移転地内の丘陵尾根上にサヌカイトの石片が散布することを確認し、周辺にも遺物の分布が予想されたため、新しく遺物散布地として認められるに至った。そして、昭和56年度に樟蔭学園の移転計画が具体化したことから、昭和57年10月12日～同年12月25日まで発掘調査が実施された（第1次調査）。その結果、数カ所で石器群が検出され、これらの石器群は黒色を呈する器面の風化状態、遺物構成・形状などが類似しており、互いに近接したほぼ同一時期の石器群と推測され、土器片は未検出であるが弥生時代と考えられている。また、出土状態や遺物内容から、付近での剥片剥離作業後の廃棄石器群と考えられている。

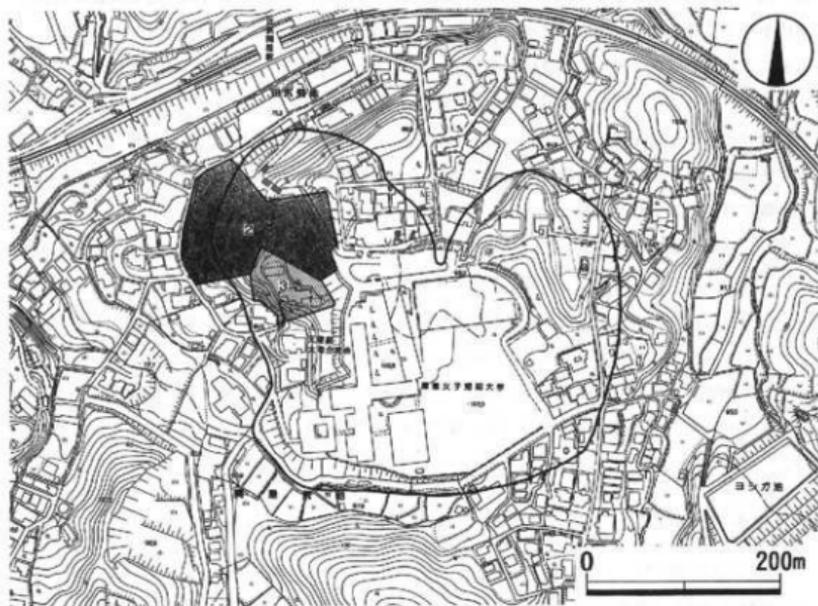


図7 清風荘第3地点遺跡調査地位位置図 (S=1/6,000)

(1) 清風荘第3地点遺跡第2次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、学校造成工事のため平成7年7月6日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することになった。

なお、調査にあたっては、調査地が金剛生駒国定公園内に位置することから平成7年7月27日付けで「特別地域内木竹の伐採許可申請書」を奈良県風致保全課に提出し、同年8月21日付けで許可された(奈良県指令風保第26号の28)。

調査地の西側はかつて建物が建っていたことからかなり削平されていたため、東側の丘陵尾根上にトレンチを設定することにした。地形図上で調査地内には南北2つの尾根がゆるやかに東から西にのびており、昭和57年の調査の際に検出された石器群が今回の調査でも検出される可能性が考えられた。しかし、立木を伐採すると南側の尾根の南半分は地滑りをおこして崩れており、もとの尾根とは比高差約2~3mもある状況であった。北側の尾根も一部南側が侵食により崩壊している状況であった。そのため、南側の尾根については当初予定していたトレンチ(4m×20m)を、旧地形が残る尾根上に縮小して(2.5m×14m)設定した(Aトレンチ)。ここでは、現地表面に器面が黒色を呈するサヌカイト片が多数散布しており、石器群の存在が予想された。

また、北側の尾根についても当初3m×40mのトレンチを予定していたが、西側で隣地のフェンスがめぐらされていたため、設定できる最大限のトレンチを設定した(Bトレンチ、4m×33m)。

調査は8月25日に北側の尾根(Bトレンチ)から人力で掘削を開始した。その結果、トレンチ東側の尾根頂部では約1m、西側の尾根裾では約0.5mの堆積があり、この堆積土中にサヌカイト片が多数含まれていた。石器としては、スクレイパーが1点出土したのみである。

次に、南側の尾根(Aトレンチ)を人力で掘削したが、全体に約0.2m~0.3mの深さで地山が検出された。当初、現地表面でサヌカイト片が多数散布していた地点については、後世の侵食によって、大部分が谷へ流されており、かつて存在したと思われる土坑については明瞭に検出できなかった。しかし、トレンチ東側では地表面に現れていなかった石器群を新たに検出した。この石器群はトレンチ南壁にかかって検出されたため、この部分を南へ2m×5m拡張して全面検出することにした。その結果、石器群は南北2.1~3m、東西3.8m、深さ0.4mの土坑に一括廃棄された状態で堆積していた(SK-01)。しかし、すべて剥片のみで製品は1点もなかった。

II 調査の結果

今回の調査において、予想された石器群が検出された。この石器群は昭和57年の調査で検出された石器群と同様に黒色を呈する器面の風化状態で、剥片剥離作業後に石器製作作業を実施した形跡がほとんど窺われない。このことから、石器として製作される目的剥片は搬出されて他の場所で集

中的に石器製作された可能性が考えられる。

今後、遺物整理、特に剥片の接合作業が進めば、どのような剥片が搬出されたか判明し、石器製作過程の一端が解明されるであろう。

(2) 清風荘第3地点遺跡第3次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、宅地整地工事のため平成7年8月30日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することにした。なお、調査にあたっては第2次調査同様、調査地が金剛生駒園定公園内に位置することから平成7年9月18日付けで「特別地域内土地の形状変更許可申請書」を奈良県風致保全課に提出し、同年10月13日付けで許可された(奈良県指令風保第26号の33)。

調査地の西側はかつて建物が建っていたこともあってかなり削平されており、さらに、東側は学校法人樟蔭学園建設の際に一部造成されていた。このことから、旧地形がわずかに残る東端に3m×15mのトレンチを設定して調査することにした。調査は11月11日から開始した。

まず、トレンチ内及び周辺の立木を伐採し、人力で掘削を開始した。その結果、調査地全面はすでに造成済みで、表土(約5cm)直下で地山を検出した。この地山はかなり堅固で、掘削にかなりの時間を要した。なお、南端部分で地山がゆるやかに落ち込んでいたため、遺物検出が期待されたが皆無であった。

II 調査の結果

今回の調査においては遺構や遺物は検出されなかったが、この周辺の尾根にはサヌカイトの集積が点在し、今後、周辺の開発に当たっては注意を要する地域である。

文 献

奈良県立権原考古学研究所編 1983「香芝町清風荘第3地点遺跡発掘調査概報」
「奈良県遺跡調査概報 1982年度」奈良県立権原考古学研究所

7 鎌田遺跡の調査

I はじめに

鎌田遺跡は奈良県香芝市の南端、鎌田小学校の周辺に位置する縄文時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。遺跡は二上山麓東部から東・北東に向かって緩やかに派生する二上山扇伏地の先端部を中心に展開しており、遺跡の北東約1kmには古墳時代後期の狐井城山古墳（全長約140m）や縄文時代前期～中期の石器生産遺跡と推定される狐井遺跡が、南西約1.5kmの地点には、大和でも有数の縄文～弥生時代の拠点集落である竹内遺跡（当麻町）が存在する。

鎌田遺跡ではこれまで8次の発掘調査が行われており、自然流路から古墳時代前期～中期の土器や木製農耕具類をはじめ、弥生土器や縄文時代晩期に属する凸帯文土器などが出土している。

また、平成4年度の発掘調査（第6次調査）では古墳時代前期の大型独立柱建物の建築部材や護岸遺構などが検出されて全国的に注目を集めた。

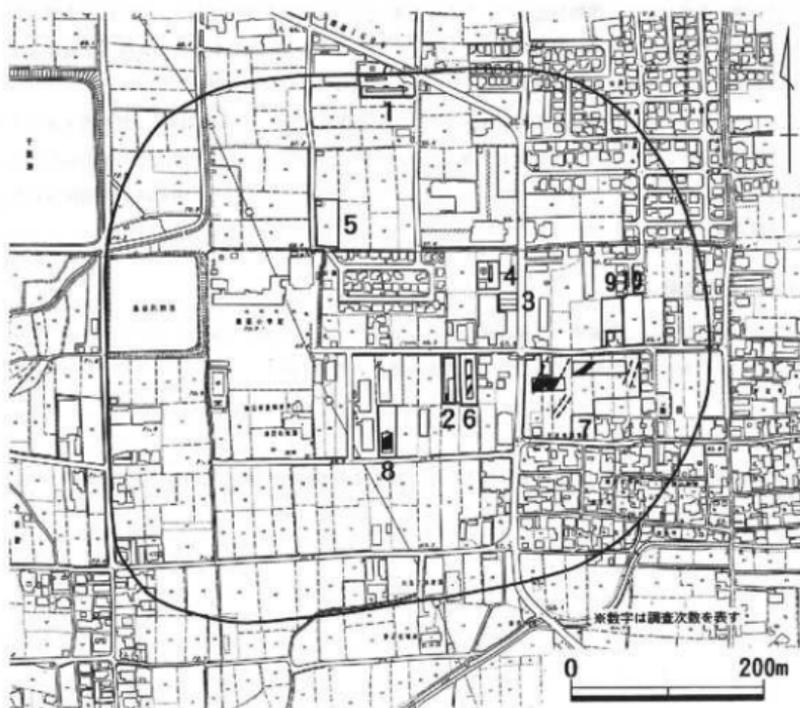


図8 鎌田遺跡調査地位位置図 (S=1/6,000)

(1) 鎌田遺跡第9次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、共同住宅建築のため平成7年8月19日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することになった。

調査は11月17日から開始した。まず、調査地の中央に3m×10mのトレンチを設定して掘削を開始した。しかし、遺構や遺物は全く検出されず基盤層に達した。層序は以下の通りである。

- 第1層 暗灰色土（層厚約15cm、現代耕作土）
- 第2層 淡青灰色砂質土（層厚約5cm、水田床土）
- 第3層 茶褐色土（層厚約30cm、整地土）
- 第4層 淡褐色土（層厚約10cm）
- 第5層 淡褐色粘質土（層厚約8cm）
- 第6層 褐色土（やや砂質、層厚約8cm）
- 第7層 褐色土（層厚約5cm）
- 第8層 茶褐色土（やや砂質、層厚約15cm）
- 第9層 橙黄色砂質土（層厚約10cm）
- 第10層 青灰色粘質土（基盤層）

II 調査の結果

今回の調査において、遺構・遺物は全く検出されなかった。平成5年度に道を隔てた南側で調査を実施（第7次調査）したが、遺構としては旧河道が検出されたのみであり、遺物もほとんど出土しなかった。地層の堆積等から、この周辺は低湿地で旧河道の氾濫が繰り返され、住居地域としてはあまり適していなかったと思われる。それに対して、今回の調査地の西方約200～300mの地点で行った調査（第6次調査）では、古墳時代前期から中期の土器が大量に出土し、さらに、旧河道に設けられた井堰なども検出されている。現在の地形では西から東に向かって緩やかな傾斜地となっているが、古墳時代、またそれ以前では、かなり地形的に差があったものと考えられる。

文 献

- 香芝市教育委員会編 1994「鎌田遺跡第7次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2」香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 1995「鎌田遺跡第8次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報4」香芝市教育委員会

(2) 鎌田遺跡第10次調査

I 調査の概要

今回の発掘調査は、施主から農地転用届けを提出したいという申し出があり、協議した結果、盛土して資材置き場とした後に土地活用を考えたいという意向であったため、盛土する前に発掘調査を実施することで合意し、平成7年9月29日付けで発掘届出書が提出された。

調査地は昨年11月に実施した第9次調査地の東隣接地である。調査は2月20日から開始した。まず、調査地の中央に4m×15mのトレンチを設定して掘削を開始した。しかし、遺構や遺物は、その存在が考えられる第4層及び、第5層上面からは全く検出されなかった。そして、第5層（灰色砂質土）からの激しい湧水のため、トレンチの掘削が困難となり、写真撮影のあと埋め戻すことにした。層序は以下の通りである。

- 第1層 暗灰色土（層厚約21cm、現代耕作土）
- 第2層 橙黄色土（層厚約10cm、水田床土）
- 第3層 茶褐色土（層厚約40cm、整地土）
- 第4層 黒褐色土（やや砂質、層厚約20cm）
- 第5層 灰色粘質土（層厚約10cm以上）

II 調査の結果

今回の調査においても、先の第9次調査と同様に遺構や遺物は検出されなかった。また、地層の堆積も第9次調査とほぼ同様であり、この周辺は住居地域には適していなかったと思われる。

以上の結果から、遺跡の東端は今回の調査地、及び第9次調査から約200～300m西及び南西方向の標高が高い地域と推定され、中心地はさらにその西方と考えられる。

文 献

- 香芝市教育委員会編 1994「鎌田遺跡第7次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査報2』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 1995「鎌田遺跡第8次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査報4』香芝市教育委員会

8 別所石塚古墳第2次調査

I はじめに

別所石塚古墳は、古墳時代前期後半～中期の大型前方後円墳が集中する馬見丘陵の南端に築かれた前方後円墳である。

古墳は東南方向から西北方向へのびた丘陵の先端部に築造されており、現在、墳丘の東南部は香芝自動車学校の教習場とつながっているが、周辺の地形測量成果等から、本来、南東方向に前方部を向けた全長90～100m前後の二段築成の前方後円墳であることが推定されている。

当古墳は、昭和45年の真美ヶ丘ニュータウンと国道165号線とを結ぶ都市計画道路路線選定に伴い後円部の主体部が発掘調査されており（第1次調査）、排水用のバラスを敷きつめた粘土礫が確認され、出土遺物から5世紀代の古墳であることが確認されている。

この発掘調査の成果を受けて、都市計画道路は当古墳を保存するため設計変更を行い、後円部の西側（現在の位置）を通過することとなったが、残念ながら翌年の昭和46年に後円部の大半が土地所有者によって削平されてしまい、現状では古墳の東側にわずかに墳丘の名残を残すのみである。

II 調査の概要

今回の試掘調査は、香芝市都市計画道路建設のため平成7年1月12日付けで事業主体である香芝市長から発掘通知書が提出されたことに起因する。古墳の後円部から前方部の墳丘に沿って市道建設が計画され、墳丘が破壊されることが確実となったため、香芝市教育委員会が事業主体である同市建設課と協議を行い、道路建設で破壊される古墳墳丘及び周濠箇所での全面調査を実施することとなった。



図9 別所石塚古墳位置図 (S=1/6,000)

今年度は、次年度予定の本調査に先行して試掘調査を要請されたため、道路建設予定地域に東西幅3m×南北長さ10mの調査区を設定後、資料収集を目的とした試掘調査を実施した。

墳丘上面および墳丘裾部は、後世の土取りや開墾によってその大部分が削平されていたが、古墳主体部に近い調査区南端で長さ約2m、層厚約10cmにわたって墳丘盛土の一部と推定される灰褐色粘質土層（墳丘第2段目の基底部か？）を確認した。

そして、当初、古墳に伴う周濠の存在が想定された墳丘裾部下の畑地では、付近一帯の基盤層である黄褐色砂質土層が東方の谷間に向けて緩やかに落ち込んで行くのみで周濠に由来する堆積層等は全く認められなかった。

後世の堆積土中や墳丘裾部下の畑地からは、中世～近世土器に混じって数点の埴輪片が出土したが、いずれも摩耗が激しく現位置にあるものは皆無であり、墳丘上の埴輪列や墓石などの外部表象施設は全く検出されなかった。

調査総面積は48㎡、調査実施日は平成8年1月17日から同年1月27日まで、実働は6日間を要した。

Ⅲ 調査の結果

今回の試掘調査は、古墳の墳丘全体に対して調査区は1箇所のみで極めて限られた期間・面積での調査であったが、別所石塚古墳の墳丘は丘陵の地山を削り出し、地山の直上に盛土を構築して成形された古墳であることを確認することができた。

しかし、比較的旧状を止めていると推定されていた古墳墳丘東側でも墳丘上面および墳丘裾部は後世の土取り等によって、その大半が削平されており、古墳本来の原形は著しく損なわれていることが明らかとなったが、墳丘上面を覆う埴輪列や墓石等、部分的に後世の破壊から免れた外部表象施設の遺存する可能性もあり、今後、道路建設予定地域にわたる全面的な発掘調査が必要と思われる。

文 献

白石太一郎・前園実知雄 1974「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊』
奈良県教育委員会

9 関屋第2地点遺跡第4次調査

I はじめに

関屋第2地点遺跡は近鉄関屋駅北東、前川と西名阪自動車道にはさまれた丘陵部に立地する石器時代の遺跡である。当遺跡は昭和49年に発見され、これまでにサヌカイトの剥片や破片が採集されている。

昭和60年度に遺跡推定範囲の南隣接地（当時、現在は遺跡範囲内）で初めて発掘調査が実施（第1次調査）された。その結果、遺物包含層や遺構は皆無であったが、客土から楔形石器や二次加工のある剥片、石核などが出土した。そして、平成6年度には遺跡推定範囲のほぼ中心と考えられる位置で個人住宅の建築に伴って発掘調査が実施（第2次調査）されたが、遺構や遺物は検出されなかった。さらに、平成8年度にも個人住宅建築に伴って発掘調査が実施（第3次調査）され、この調査では遺構は検出されなかったが、サヌカイト製石器の剥片が数点出土した。

今回の調査地は第1次調査地の南東に位置し、遺跡推定範囲の南端で丘陵裾にあつている。したがって、第1次調査と同様に石器類の堆積層の存在が期待された。

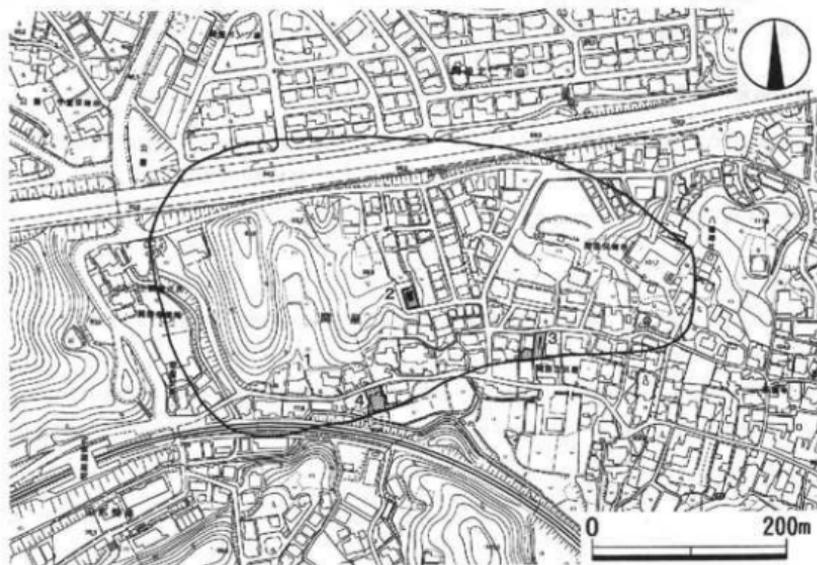


図10 関屋第2地点遺跡調査位置図 (S=1/6,000)

II 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建築のため平成7年7月7日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することになった。

調査は施主との協議から、工事着手前の11月22日から開始することになった。しかし、当日現地へ赴くと、既に工事が開始されており現地表面から約4m掘削されていた。そして、調査地内は盛り上げられた拵土によって、新たにトレンチを設定して掘削するスペースがない状態であった。そのため、まず掘削されていた部分の壁面の精査を行い、遺物包含層の有無を確認することにした。層序は以下の通りである。

- 第1層 盛土（層厚約1.8m）
- 第2層 黒灰色土（層厚約0.2m、旧水田耕作土）
- 第3層 暗橙黄色土（層厚約0.2m、水田床土）
- 第4層 暗灰色土（層厚約0.3m、整地土）
- 第5層 青灰色土（地山）

この地層堆積の中で遺物が包含されている可能性が考えられたのは、北側の丘陵から流れ落ちたと考えられる第4層のみであった。しかし、地層の断面においては全く遺物は含まれていなかった。

III 調査の結果

今回の調査では遺構・遺物は検出されなかった。また、地層の観察においても遺物が検出される可能性はほとんどない状況であった。周辺の地形から、今回の調査地の北側の丘陵が遺跡の中心である可能性が高い。

文 献

- 香芝町教育委員会編 1986「関屋第2地点遺跡隣接地発掘調査報告」「鶴峯荘第1地点遺跡 第2次発掘調査概報」香芝町教育委員会
- 香芝市教育委員会編 1995「関屋第2地点遺跡」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3」香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 1997「関屋第2地点遺跡（第3次調査）」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3」香芝市教育委員会
- 増田一裕 1974「補 関屋第2地点遺跡」「ふたがみ」学生社

10 顕宗陵古墳第3次調査

I はじめに

顕宗陵古墳は、二上山西麓から東方へ緩やかに派生する通称「藤山丘陵」とよばれる標高約58m前後の低丘陵の北東付近に位置する直径約50m前後の円墳である。

当古墳の南方約300mの同一丘陵上には、小規模な横穴式石室や石棺直葬とする直径約8～20m前後の小規模な円墳数基からなる北今市・藤山古墳群（現在ほとんどすべてが消滅）等の古墳時代後期の小規模な古墳が分布している。

当古墳の規模は、地形図をみる限りでは径50m前後、高さ5m前後の円墳と考えられ、藤山丘陵に造営された北今市・藤山古墳群の中では最大規模の古墳と想定されるが、現在、宮内庁より第15代顕宗天皇の陵墓として陵墓内への立ち入りが禁止されているため詳細な古墳の規模や埋葬施設、築造時期等については全く不明である。

当古墳の周辺では過去に2度発掘調査が実施されているが、古墳から北方約30mの地点で平成7年に実施した第2次調査では、当古墳に伴う可能性は低いものの北今市・藤山古墳群の存続時期に相当する古墳時代後期の須恵器片の他、奈良時代の須恵器片も数点出土しており、真上の藤山丘陵上にこれらに関連する何らかの遺跡が存在していた可能性が考えられる。

今回の調査地は、古墳の東側縁辺部と推定される地点の東方約10mの地点で、「藤山丘陵」の北東丘陵末端部に位置する。

II 調査の概要

今回の発掘調査は、分譲住宅建設のため平成7年12月1日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。当古墳の周辺では、これまで2度試掘調査が実施されたのみで顕著な遺構や遺物は検出されていないものの、今回の開発地域西側が顕宗陵古墳の裾部に接しており、古墳の墳丘裾部の一部や周濠等が検出される可能性が強いことから、香芝市教育委員会が事業者と協議を行い、古墳の範囲確認および周濠の有無確認のための試掘調査を実施することになった。

調査は、顕宗陵古墳の墳丘裾部及び周濠部想定地に近接する開発区域の西隅に北から第1調査区（幅4m×長さ8m）、第2調査区（幅1m×長さ8m）の東西方向の試掘調査区を2箇所設定して調査を実施した。

調査区の基本順序は下記のとおりである。

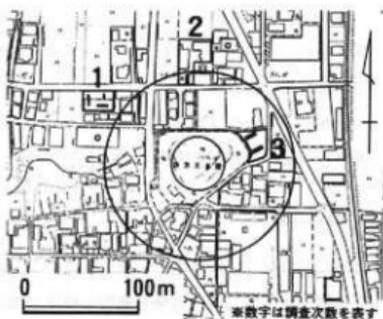


図11 顕宗陵古墳位置図 (S=1/5,000)

第1層 暗茶色砂質土層 [層厚45cm] (耕作土及び陵墓周濠掘削時の堆積土?)

第2層 暗茶褐色砂質土層 [層厚8cm] (旧耕作土の床土)

第3層 黄褐色砂質土層 [層厚8cm] (地山、鉄分沈殿層、硬質)

第4層 黄褐色粘質土層 (地山)

試掘調査の結果、当初予想していた周濠や埴輪等古墳に伴う遺構や遺物は確認されず、また、その他の遺構や遺物も全く検出されなかったことから全面的な本調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成および写真撮影終了後、当日中に埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は約40㎡、実働は平成8年2月14日の1日間のみであった。

Ⅲ 調査の結果

今回の調査地は、これまでの調査地の中でも最も古墳に近い墳丘裾部に接するため、周濠や埴輪等の古墳に伴う何らかの遺構や遺物の検出が期待されたが、古墳以外にも顕著な遺構や遺物は全く確認されなかった。

調査地は、墳丘裾部の傾斜面から推定しても約1mは低く、また、土層の堆積状況からみても古墳墳丘裾部の東側および南側は後世の削平および埋め立てによって大幅な地形の改変をうけているものと思われる。当古墳の周濠の有無については疑問は残るが、陵墓として墳丘内部の立ち入りが制限されている以上、当古墳にかかわる考古学データ収集を目的として、とくに近接地域については今後も慎重に調査を進めて行く必要がある。

文 献

香芝市教育委員会編 1995「願宗陵古墳第2次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報4』香芝市教育委員会

图 版



1. 桜ヶ丘第1
地点遺跡
第7次調査
調査地全景
(北から)



2. 桜ヶ丘第1
地点遺跡
第7次調査
遺物出土状況
(北西から)



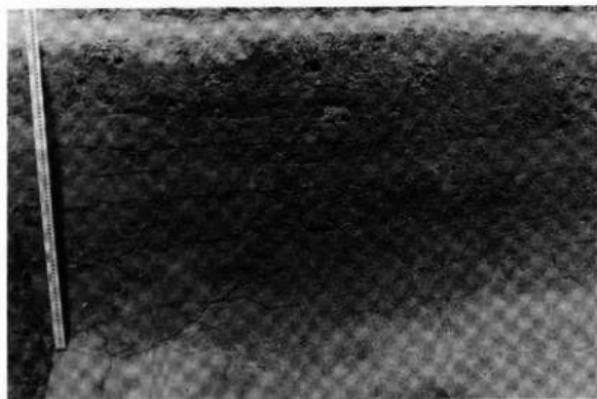
3. 桜ヶ丘第1
地点遺跡
第7次調査
遺物出土状況
(北から)



1. 今泉遺跡
第3次調査
発掘調査状況
(西から)



2. 今泉遺跡
第3次調査
調査区全景
(東から)



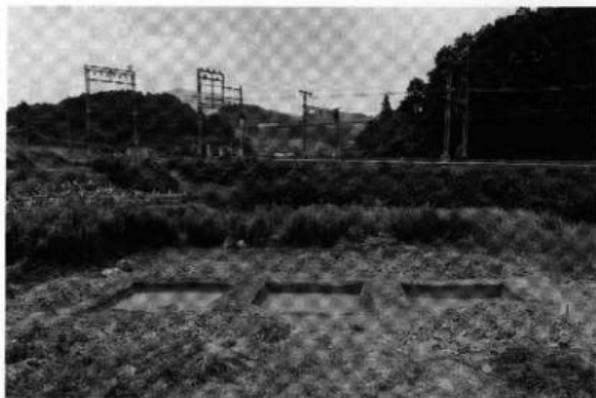
3. 今泉遺跡
第3次調査
調査区南壁土
層堆積状況
(東から)



1. 黒岩遺跡
第1次調査
調査の状況
(北から)



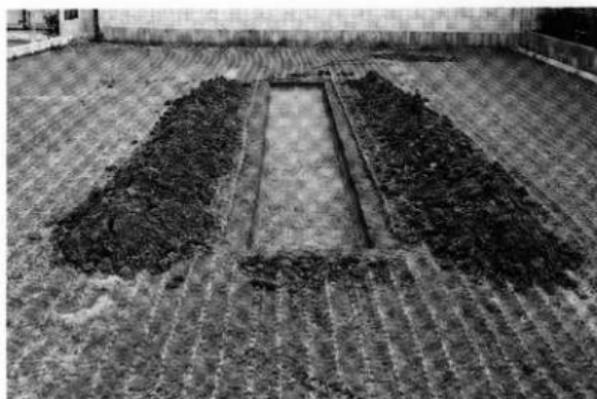
2. 黒岩遺跡
第1次調査
調査区全景
(北から)



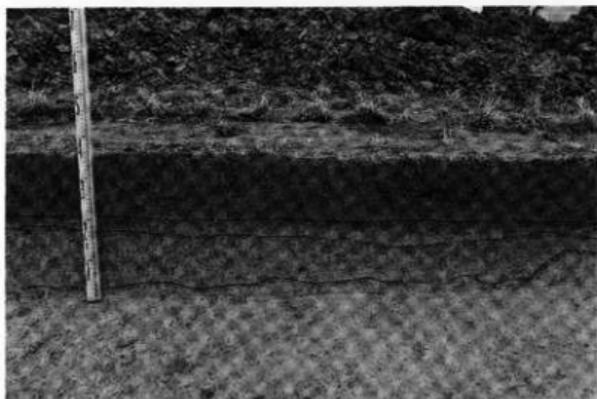
3. 黒岩遺跡
第1次調査
調査地全景
(西から)



1. 遺物散布地
第2次調査
調査区全景
(北東から)



2. 遺物散布地
第3次調査
調査区全景
(北から)



3. 遺物散布地
第3次調査
西壁土層断面
(東から)



1. 狐井遺跡
第11次調査
Bトレンチ
完掘状況
(北から)



2. 狐井遺跡
第11次調査
Cトレンチ
完掘状況
(北から)



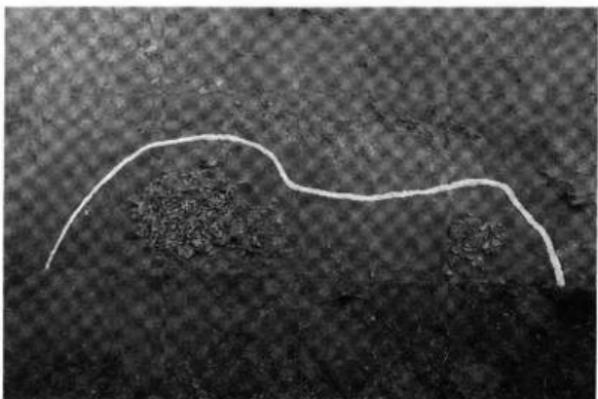
3. 狐井遺跡
第12次調査
調査区全景
(南東から)



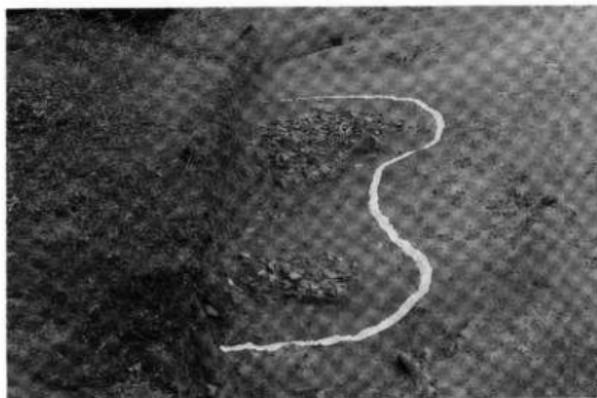
1. 清風荘第3
地点遺跡
第2次調査
Aトレンチ
完掘状況
(東から)



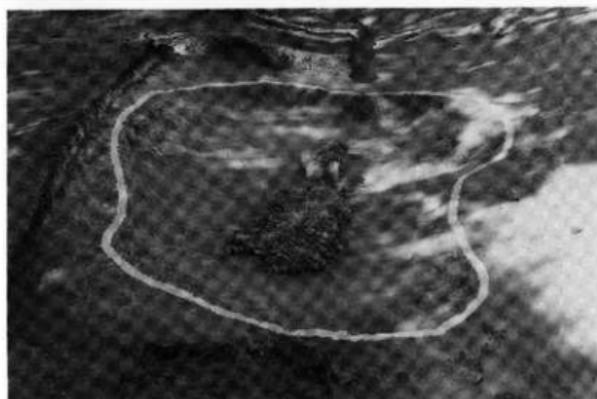
2. 清風荘第3
地点遺跡
第2次調査
Bトレンチ
完掘状況
(東から)



3. 清風荘第3
地点遺跡
第2次調査
Bトレンチ
SK-01
遺物出土状況
(南から)



1. 清風荘第3
地点遺跡
第2次調査
Bトレンチ
SK-01
遺物出土状況
(東から)



2. 清風荘第3
地点遺跡
第2次調査
Bトレンチ
SK-01
遺物出土状況
(東から)



3. 清風荘第3
地点遺跡
第3次調査
トレンチ
完掘状況
(北から)



1. 鎌田遺跡
第9次調査
調査区全景
(北から)



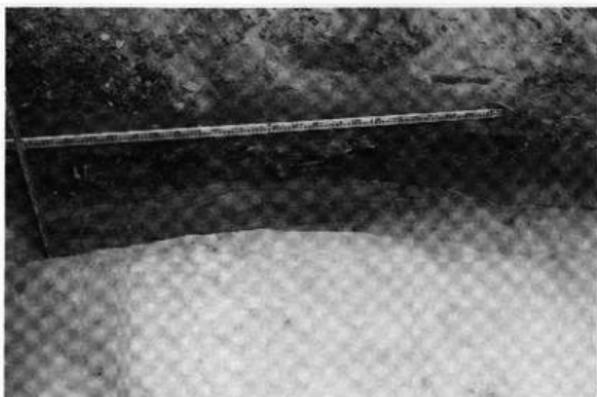
2. 鎌田遺跡
第10次調査
調査区全景
(南西から)



3. 鎌田遺跡
第10次調査
調査区全景
(東から)



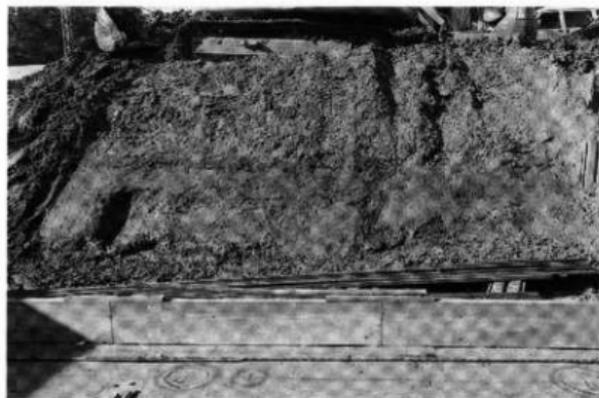
1. 別所石塚古墳
第2次調査
調査区全景
(南東から)



2. 別所石塚古墳
第2次調査
北壁土層断面
及び墳丘盛土
(南東から)



3. 別所石塚古墳
第2次調査
墳丘裾部及び
北壁土層断面
(南東から)



1. 関屋第2地点
遺跡第4次調査
土層堆積状況
(東から)



2. 顕宗陵古墳
第3次調査
第1・2調査区
全景
(北東から)



3. 顕宗陵古墳
第3次調査
第1調査区
完掘状況
(北東から)

香芝市埋藏文化財発掘調査概報6

— 平成7年度 —

発行 香芝市教育委員会

香芝市本町1397番地

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京町3丁目464番地